

のんびり
VRMMO記
10

まぐろ猫^{かい}@^ね板猫

Illustration: まろ

メイ

二足歩行の羊の魔物。
身の丈より大きな
ハンマーが武器。

リグ

可愛い
蜘蛛の魔物。
ツグミのフードの
中が位置。

ナナミ

以前の道中で知り合った
プレイヤーキャラ。
猫人族の女性で
自由奔放な性格。

このえ つぐみ
ツグミ(九重鶯)

本編の主人公。25歳。
双子の妹達の親代わりで、
ゲーム世界では生産職に。

ヒバリ
このえ ひばり
(九重雲雀)

双子の姉。13歳。
活発な性格で、
幽霊以外は
怖いものなし。

いいだ みさ
ミィ(飯田美紗)

双子の幼馴染。13歳。
外見に反し、戦闘大好きの
ハードゲーマー。

このえ ひたき
ヒタキ(九重鶯)

双子の妹。13歳。
あまり感情を表に出さないが、
実は悪戯っ子。

主な登場人物
Main Characters

金曜日の朝。

目覚ましに起こしてもらった俺——九重ここのえなぐみは、二度寝をしないよう気をつけながら、ゆっくり起き上がった。

大きな欠伸あくびをひとつしてから着替え、顔を洗うために下の階へ。

さっぱりしたらキッチンへ行き、エプロンを着用し、気合いを入れて朝食を作り始める。

「美味しくて、栄養があつて、お腹いっぱいになるやつ……」

吹きながら手を動かし、昨日風呂に入りながら考えていたものを作ろうと思う。

昨日のパンと、具材たつぶりのオムレツ。あまり合わないとは思うが、お味噌汁だ。

もう慣れたものなので手早く作っていると、双子の妹達、雲雀ひばりと鵜ひたきがパタパタ足音を響かせ2階から下りてきた。

どちらが先にトイレへ駆け込むかの勝負だったらしく、敗者鵜の「もおお！」という慟哭が響く。彼女が負けるとは珍しい。

朝の恒例行事と化した争いが終わり、2人がリビングに入ってきたので挨拶をしたりされたり。作った料理をテーブルまで持って行ってもらったり、俺は飲み物を持って行ったり。準備が終われば3人揃っていたできます。うん、味は自画自賛出来るな。

「ねえねえつく兄にい、今日は金曜日だから長めにゲームしても良いよね？ 時間かかるかもしれないんだあ」

「やりたいことがいっぱいある。嬉しい悲鳴。わあ」

「そうだな。明日は休みだから多めにやっても大丈夫だ」

「ふへへ、やったね」

「ん、やったね」

雲雀の言う「ゲーム」とは、俺達がプレイしているVRMMO【リアル&メイク】——通称R&Mのことだ。

和気あいあいとした会話も楽しみつつ朝食を終え、学校へ行く雲雀と鵜を見送った。今日も元気いっぱいだなにより。

見送って家の中へ帰った俺は、いつものように家事。

やってもやっても終わらない、無限ループと化している作業。

今日はアレとソレとコレとソコと、と悩みながらも手を動かしていると、あっという間に時間が経ってしまう。

確認を忘れがちな携帯電話を見ても、パソコンを見ても、誰からも連絡が無いので、はかど捗ってしまっただけがある。

「……夕飯、夕飯、夕飯なあ」

全世界の主婦の皆様が共通して悩んでいるであろう献立。

もちろん俺も例外ではなく、悩めば悩むほど他のことに神経が行ってしまうというかなんと言おうか、簡単に言えば家事がより捗った。

残りのパンは夕飯に出来るほどではないけど、俺1人で食べきるのは無理な量だし。

「……」

ただでさえ静かな家に静寂が訪れる。

数秒思考を巡らせ、「あ」という呟きが静かなリビングに響き渡った。

今日の夕飯はグラタンにしよう。そうしよう。

なぜグラタンという答えに至ったのかは、よく分からない。

きつと、自分が食べたかったの一言に尽きると思う。うん。

そうと決まれば話は早い。グラタンは、食べるのは一瞬だけど、仕込みに結構な時間がかかる。まあ、どんな料理でもそうだけどな。

何のグラタンにするか考えつつ、手早く家事を終わらせてキッチンの中へ。エプロンを着ければ準備万端。^{ばた}

グラタンにおいて一番大事なのはホワイトソースだ。まあ……マカロニ派やチーズ派もいるだろうけど。

吹っ切れたというか、目標の出来た俺はパパッと料理を作れちゃう……いや、待ち時間も多からそれなりに手際よく作れたと思う。

「さて、あとはオーブンでこんがり焼き上げれば完成だ」

大きめの深型グラタン皿の、縁^{ふち}ギリギリまでグラタンが入っており、これが焼き上がればさぞかしお腹が満たせることだろう。

このグラタンは1人1皿、家にあるオーブンはひとつ。

焼き上がるのにも時間がかかるので、とにかくさっさとグラタンをオーブンに入れて焼くん

だ！ って感じ。生焼けはダメ絶対。

つと、そんなこんなをやっていたら家の外が暗くなり、玄関が騒がしくなって、雲雀と鵲が帰ってきた。

2人はまず、手洗いとうがい。しばらくすると、リビングの扉が開かれた。

彼女達は、リビングに入ったらすぐさまくんと鼻を鳴らし、キッチンテーブル越しに俺を見てくる。ちよつと笑ってしまった。

「はは、お帰り。雲雀、鵲」

「うん！ たいま、つぐ兄い。美味しそうな匂い〜！」

「たいま。くんくん、これはつぐ兄^{にい}お手製グラタンの匂い」

部活で思いきり運動したからか、グラタンの焼ける匂いに、空腹が刺激されているようだ。でも出来るにはまだまだ時間がかかる。

美味しそうな匂いにうっとりしている2人に、お風呂を勧め^{すす}てみる。もちろん即承諾。

「んんー、そうだなあ。パンとグラタンだけじゃ野菜が足りないし、サラダでも作りますか」

用意するのは、ジャガイモとレタスとトマトと塩コショウ。

簡単に説明すると、適当な大きさにジャガイモを切って、レンジでチンして、適当に塩コショウしながら潰して、これまた適当に切ったトマトとレタスと共に皿へドン。

ほぼレンジでチンで出来た一品。頑張ったから手抜きではない、はず。

いつもは雲雀達が手伝ってくれるけど、今日は自分でテーブルに並べようかな。

オーブンでグラタンが焼き上がるまで、手持ちぶさただしね。

ゆっくり配膳しているとグラタンが焼き上がり、飲み物を用意して椅子に座ったところで、ちょうどお風呂上がりのホカホカ雲雀と鵜が現れた。

本当に良いタイミングだ。

しきりにお腹を擦りながらのっそり歩く雲雀と、素早くサッと席に座ってグラタンをロックオンする鵜。双子だけど、こういうところで性格が出て面白い。

揃って食べるときは、基本的に俺が「いただきます」をするので、今か今かと2人は待っている。

「いただきます。グラタン熱いから気をつけて食べるんだぞ」

「いったただっきまあ〜す！ あつ、あつ、うま、うまつ！」

「いただきますふはふ」

雲雀と鵜が続いて、俺も食べ始めた。

熱々のグラタンは、口の中に入れると大惨事を引き起こしかねないので気をつけよう。

十分に冷ましたグラタンをパンの上に載せ、ぱくりとひと口。

中にも上にもたつぷりのチーズと、ぷりつとしたマカロニが良い味を出していて最高だ。

一心不乱に食べていると、ふと雲雀が今日の予定について話し出す。

「あふつ。そうそうつぐ兄い、今日の予定なんだけど、豪華二本立てにしようと思うよ！
美紗ちゃんたってのお願いと、なんだか面白そうなやつ」

「がんばって捻った。楽しんで欲しい」

鵜が器用に食べながら、うんうんと頷いた。

「そうだな、すごい楽しみだ」

……双子の友達である美紗ちゃんのお願いは、わりと簡単に想像がつく。

ああいや、想像と違うかもしれないから、決めつけるのはよそう。

夕飯を食べ終わったら、いつものように食器をシンクに置いて水に浸ける。

ご満悦な表情を浮かべてお腹を擦っていた2人はゲームの準備。
渡されたヘッドセットを持つ俺の横で、雲雀がパソコンに向かってキーボードをカタカタ。
美紗ちゃんと連絡を取り合っているらしい。
諸々の準備が終わったら、皆でヘッドセットをかぶり、横についているボタンを押す。
すると、すぐさまゲームの世界へ誘われた。



大都市アインズの噴水広場。

俺がログインしたと同時に、美紗ちゃん、いやミイから参加申請が来て、あまりの早さに少し笑ってしまった。

ヒバリとヒタキがログインして、次いでミイも現れる。ペットのリグ達も喚び出すと、俺の周りは一気に賑やかになった。

そしてとりあえず広場の端に移動。

「今日もよろしくお願いいたしますわ、ツゲ兄様」

「ああ、今日もよろしくな」

人気の無い端の方に移動し終えて軽く挨拶。

ミイは今日をとて楽しんでにしていたようで、狼の耳と尻尾がぶんぶんとフィーバー状態だ。

じっくりゆっくりたっぷり楽しむらしいし、まずはミイたつてのお願いとやらを、やってみるのかな。

ヒバリが言っていた、なんだか面白そうなやつ、つてのも気になるけどな。

どうせどっちもやるんだから気にしなくていいか、と心の中で自分にツッコミを入れ、楽しそうにしているヒバリとヒタキの方に視線を向けた。

それだけで彼女達は、俺がなにを言いたいのかわかったらしく、しっかりと頷いてミイにコソツと話しかける。

俺によじ登ってきたリグの背中を撫でつつ、話が終わった3人が口を開くの待つ。

「とりま、朝っぱらから、ミイちゃんたつてのお願いである、巨石のゴーレム退治ってクエストやるうー！」

元気なヒバリから言われたのは、やはりミイのお願いで、モンスター退治系のクエスト。

ゴーレムって、あの大きな岩の塊で、ええと物理攻撃でぶん殴ってくるってやつ？

「はい！ ゴーレムはとても硬い魔物のようです。ですが体のどこかに魔石が露出しているので、そこが弱点とのことですよ」

「ん、攻略掲示板で対策はバッチリ」

ミイとヒタキが楽しげな様子で乗っかり、足元を見ればメイがピョンピョン跳びはねて、鼻息を荒くして今か今かと待っている様子。

「とうわけでツグ兄い、ギルドに退治クエスト受けに行こう！」

「はこよ」

そんなこんなで皆を連れギルドに行き、巨石のゴーレム退治って依頼書を、クエストボードからペリッと引き剥がした。

もしかしたら、防御力が高くて倒すのに時間がかかるかもしれないから、と受けるクエストはこれだけ。もしかしたらを考えられるって、素晴らしいとお兄ちゃん思うぞ。

【街道を塞ぐ巨石のゴーレム退治】

西の門から道なりに進むと、街道を大きな岩の塊が塞いでいます。騎士団の調査によるとゴーレムの反応を示しており、魔物退治専門の冒険者への依頼となります。ゴーレムは攻撃力、防御力共に規格外ですので、お気をつけください。

【依頼者】冒険者ギルド（NPC）

【ランク】E〜C

【報酬】討伐完了で5万M³

受付も混んでいなかったのでスムーズに進み、軽い説明を受けて俺達はギルドをあとにした。

クエストの場所が少し遠いこともあり、噴水広場に戻らず歩きながら作戦会議だな。

街の中は人が多くて、話しながら歩くのは至難の業^{わざ}だけど、門をくぐって外に出れば、人の数は数えるほど。

クエスト内容の確認やゴーレムの特徴など、色々と話しながらのんびり歩いて行く。

こちらの道は冒険者が数人いただけで、行商人などNPCの姿はなかった。まあ当たり前か。15分程度歩いていると、巨大なゴーレムであろう岩が現れる。

「攻撃するか、めっちゃ近づくと、起き上がってきて戦闘になるって、受付の人が言ってたよね。この辺はピクリともしない」

「ん。いつも通りの作戦で行く。あとは臨機応変で頑張る」
「相手は岩の塊ですので、剣より拳より、打撃の鬼である大鉄槌が弱点だと思われます。あと、関節も弱点かもしれませんわ。それに魔物ですもの、とにかく殴れば倒せると思いますが。ふふ、ちよつとはしゃぎすぎですわね」

ゴーレムの周りには白線が引かれており、騎士団の人達が頑張った証かと、1人で納得してしまふ。

俺が戦うとかではないからアレなんだけど、とりあえず戦ってみるしかないと思う。

ヒバリ達が、勝負にならない強敵に挑むとは思えないしな。安全第一。

作戦会議などは彼女達に任せ、俺はゴーレムであろう大きな岩を眺めてみる。

大きさは俺を縦に3人分、横に3〜5人分つてところか。

色は、白と灰色が混じった普通の岩という感じで、土や赤茶色の汚れがついている。これはご愛嬌あいきょうかもしれない。

どうやら作戦は、ヒバリがゴーレムの攻撃を引き受けるタンク。

ヒタキが小桜と小麦を連れて遊撃。

ミイはメイと左右からゴーレムをひたすら攻撃。

リグは俺の護衛で、俺はHPMP回復係と、いつも通り。

パーティーのバランスが良いから、レイドボスでもない限り倒されるってこともないだろう。

ヒタキが、周囲に巻き込まれそうな人などがいないことを確認。

皆で決めた場所に着くと、ヒバリが盾を構え剣を振りかぶり、ゴーレムに叩き付ける。

「んじゃあ、私がヘイト稼ぐまでちよつと待つてから攻撃始めてね！　いくよ、さあんにい、いち、おんどりや……硬っ！」

カーンという、もの悲しい音が鳴り響いた。やはり鉄の剣だとしても、石を斬るのは難しいよな。

「ヒバリちゃん剣はゴーレムの継ぎ目、盾は平面を殴ってくださいな！」

「あつ、うん！　よし、ターゲットは私に固定したよ！」

ヒバリ達が戦い始めて少し経った。

ゴーレムの攻撃力が高いので、ヒバリのHPが勢いよく減るときがある。

それに合わせ、俺はポーションを投げる。

リグにはゴーレムの顔を目がけて糸を吐はいてもらう。

一瞬で払われてしまうんだけど、動きが雑になったりするので、多少の効果はあると思いたい。

ゴーレムの攻撃で一番厄介なのは、自分の関節などを無視した360度全方位振り払い、かな。ヒタキのシャドウハウンドが一撃で全て倒されてしまうんだから。

「……むう。弱点、どこだろ？」

スキル【MP譲渡】をヒタキに施していたら、ふとそんな呟きを残してまた走って行く。

そう言えば、体のどこかに露出してる弱点の魔石があるって……ど、どこに？

ゆっくりじっくり見ることの出来る俺でさえ見つけられず、ミイとメイが打撃でチマチマとゴーレムのHPを削っていく。

どうやらこのゴーレムは再生能力を持っているらしく、戦闘が長引きそうだな。

そんなこんなでヒバリにHPポーションを投げていたら、不意にミイがヒバリへ声を張り上げた。

「ヒバリちゃん、ゴーレムの様子が変ですわ！」

ゴーレムになんだか赤いモヤのようなものが漂い始め、ヒバリは、キツいながらも捌いていた攻撃を連続で食らうようになった。

いったん下がって体勢を立て直した方が良いんじゃないか、そんなことを言う間もなく、ゴーレ

ムの拳がヒバリに直撃した。

一瞬でHPが消し飛び、光の粒となって消え去る。

ヒバリが「びえっ！」と意味をなさない言葉を最後に消えたのは少し面白かったけど、彼女がいないと俺達は色々マズい。

敵の360度攻撃で、範囲外にいた俺とリグ以外は全滅。ちよつと敵の強さを見誤ってたな。すると何もなかったように、ゴーレムは丸まった大きな岩の姿を取った。

範囲内に入らなければ良いのか、攻撃をしなければ良いのかよく分からない。

「白線の外側にいる俺達には目も向けない。お金減っちゃうから、このままダッシュでアインドに戻ろうか、リグ」

「シュ」

しょんぼり落ち込むリグの背中を撫で、クルッとゴーレムに背を向け走り出す。

噴水広場に戻ればヒバリ達もいるはず。転ばないように気をつけないと。

(;w ;)



皆がいなくなってしまう、リグを抱えて小走りでアインドへ戻る。

大通りを抜けて噴水広場へ行くと、隅つこの方に、ガックリ肩を落としているヒバリ達がいた。

俺が近寄ると、メイや小桜小麦がパツと顔を上げ、それに合わせて顔を上げ、一気に口を開くヒタキ、ヒバリ、ミイ。

「……む、ステータスが下がったしお金もちよっぴり失った」

「めっちゃ悔しい〜!」

「ファンタジーは脳筋だけではダメですね……」

そう言えば、初めて死に戻りつてやつ? をしたな。

ステータスが下がって、お金も失うというペナルティがあつて、ステータスが下がる時間は1時間だっけ?

落ち込んでいた彼女達も、少し経てば元氣を取り戻し、早速ゴーレムを倒すための作戦を立て始めた。

弱点が露出していないゴーレムなら、高火力で一氣にHPを削りきる。

物理耐性のあるゴーレムなら、魔法攻撃。

他にギミックと呼ばれる仕掛けがあるなら、それをどうにかすれば弱体化するのかなんとか。

ヒタキが攻撃の合間に、ゴーレムの様々なところをスクリーンショットしていたので、じっくりねつとりと弱点を探す。

「石っぽいのは無い……」

ヒタキが頑張つて撮ったスクリーンショットを見ても、ミイが言っていた魔石の露出は無い。

うーん、いつものチーム編成に魔法とか全部盛りすれば行けるかな……って、これがいわゆる脳みそ筋肉かもしれない。

負けたことによるペナルティがあるから、再戦は時間が経ってからだけだな。

失った分のお金を俺が渡すと、ヒバリ達は屋台へ走って行ってしまった。

お菓子や買い食いにはあまり興味ないし、俺はリグ達と大人しく待つことにした。

暇なのでスクリーンショットを眺める。

魔石なあ……頭の天辺にも無いから足?

いや、関節とか見えない場所?

脇?

太股?

「……んん? いーえむいー、ていーえいち?」

頭にある溝に、微かな文字が彫られていることに気づいた俺は、視力の限界と戦いながら一文字

一文字読んでいく。

emeth? 読み方はそのまま良いのかな?

そんなことをしていたら、ヒバリ達が屋台巡りから帰ってきた。

もちろん両手には戦利品が握られ、口をモグモグさせたヒバリが俺の手元を覗いてくる。

「ふえへ?」

「……ヒバリちゃん、口にもものがあるときはしゃべっちゃダメ」

「あ! そうでした。ゴーレムには大概、エメスと書かれているのがお約束でしたわ。確か真理、生命を吹き込むという意味です。こちらもお約束なのですが、頭のeを消してメスにすると、自壊するのです。ここを狙えば次は勝てますかしら?」

ミイがお約束と口に行っていることから、ゲームのゴーレムにはよくある展開らしい。

敵の弱点が分かったと言っても、その文字が彫り込まれているのは、頭というか、額にある真一文字の溝。狙って消すには難しい位置だ。

弱点があるなら余裕余裕と、やっとの思いで肉を呑み込んだヒバリが、作戦会議を始めた。

ヒバリがゴーレムの敵愾心を煽り、ミイとメイが攻撃などは変更なし。

しかし、なんと今回、重要な役割を持つのは小桜と小麦。

2匹のじゃん術で、ひたすら頑張つて文字を削ってもらおうって寸法だ。

もちろん俺はヒバリにポーションを投げる係。

リグはゴーレムの関節に糸を吐いて行動を阻害する係で、ヒタキは遊撃隊としてサポート。

そんなこんなで色々と話していたら、ステータスダウンも終わり、ヒバリ達がとてもやる気に満ち溢れている。やる気があるのは良いことだ。

「よおし、第2回戦に向けて出発〜!」

元気の良いヒバリのかけ声と共に、俺達は再び歩き出す。

先ほどと同じだけの時間をかけてゴーレムの場所へたどり着き、鎮座している大岩を確認。

近寄らなければ大丈夫っぽいけど、いつ暴れ出すか分かったものじゃ無いからな。とりあえず位置について準備しよう。

ゴーレムの正面にはヒバリ、左右にミイとメイ、ゴーレムの後方にヒタキ、ヒバリの後ろの方に小桜と小麦。

リグは俺の頭から下りて、元気良くピョンピョン飛び跳ねていて、すごく可愛いと思いました。皆がボジションにつくと、ヒバリの一撃と共に戦いが始まる。

(・エ・´)ゝ

「メイ！ 足の関節を狙いますわ、出来れば折りますわよ！」

「めめっ！ めえめめえめ！」

「ふっふっふ、今回は全部の攻撃を受け止めてみせるんだからね！」

俺はポーシヨン係なので、ゴーレムからの攻撃が来ない場所にいる。

やはりゴーレムの大振りな攻撃が掠るだけでも、ヒバリのHPがゴリツと削られてしまう。

俺はすぐさまヒバりにHPポーシヨンを投げ、補填出来たことを確認してホツとする。

ひたすら投げるだけの簡単なお仕事……ただし気を揉む。

「この攻撃は横に飛んで、斜めからの振りかぶりは盾を当ててそらして、正拳突きも横に飛ぶ！ あとぶん回は後ろに飛ぶ！」

前回の戦いからなにかを学んだヒバリは、大きな独り言を呟きながら、自分の何倍もの体格差があるゴーレムの攻撃を、避けたりそらしたりと忙しない。

若干ハラハラしながら見守っていると、ヒタキが大きな声で「あ！」と言うので、そちらに視線を向ける。

彼女が両手に持っていたナイフの1本が無くなっているので、多分それ関係だと思っけど。

(>エ<)ゝ

「ナイフ投げたら関節に刺さって抜けなくなった。がっくし」

「メイ聞きましたわね！ あのナイフを狙って大鉄槌を打ち付けなさい。きっとゴーレムの足が壊れますわ！」

「めっ！」

ヒタキの悲しい嘆きに反応したのはもちろんミィで、的確にメイへ指示を出した。

ヒタキがナイフを見て、なんとも言えない表情を浮かべているけど、これも魔物を倒すための尊い犠牲ということで諦めてくれ。

よそ見をしていると思われるけど、ヒバりにポーシヨンを投げる作業を忘てはいない。

あと、小桜と小麦にはMPポーシヨンかな。

何度もやん術で頭の溝にある文字を消そうと頑張っているが、さすがにゴーレムも自身の弱点だと分かっているのか、しつかり手で守るので上手くいっていない。

けど、守るものがたくさんあるのは大変らしい。どんどんゴーレムの動きが鈍ってくる。

リグが何をしているのかと言うと、頑張って糸を吐いているんだけど、ゴーレムに通用するわけも無く、ちよつと落ち込み気味の背中が悲しい。

チラッとこちらを見たので、手招きで呼び戻しておいた。

そしてHPが半分を切ったヒバリの背中に向け、HPポーションを放る。よし、とうてき投擲成功率は6割だ。

卓越したジャンプ技術により俺の頭に着地したリグに、簡単な提案をしてみる。

「リグ、俺のMPも全部使って、強い糸吐けるか？」

「シ、シュッ！」

「ゴーレムに一泡吹かせてやろう」

「シュッシュ」

(。・w・。)b (´・w´)

妹達のために、一瞬の隙を作ることが出来れば、つて感じ。

リグからOKをもらったので、俺は早速行動に移すことにした。



リグ自身のMPと、俺の【MP譲渡】で渡したMPを使い、しつかりがっしりした糸を、とあみ投網のように投げてもらう。

ゴーレムは邪魔くさそうに糸を払うも、今度はちゃんとまとわりついた。

ゴーレムが腕を振り上げた瞬間、リグの体がフワッと持ち上がったので、俺は糸を掴み踏ん張った。

なんとなく読めてはいたけど、俺が踏ん張っても、あの岩で出来たゴーレムに力で勝てはしない。

そして、俺とリグは面白いくらい簡単に宙を舞った。

わあ、良い天気だあ。

「ふあっ！ あばばば！ ツグ兄いが空飛んでるんですけど！」

「でも今が攻め時ですわ！ メイ！」

「めっ！」

(´・エ´)

俺とリグが空を飛んだことに驚いたヒバリだったが、彼女以外の対応は早い。
ミイとメイの猛攻が始まった。

時間がゆっくり進むのを感じながら、俺は来るきた衝撃に備え、体に力を入れた。

俺がリグを離せばスマートな着地が出来るかも、なんて思ったが体は動かない。

痛くないから大丈夫だと信じて目を瞑る。

「おーらあーいおーらあーい」

ヒタキの間延びした声が聞こえて、衝撃の代わりに細くて柔らかいものに包まれた。

恐る恐る目を開くと、珍しく満面の笑みを浮かべたヒタキの姿。

お姫様だつこ……いや、コレは横抱きでただの救助活動。気にしたら負け。

上機嫌なヒタキと苦笑いの俺が顔を見合わせていると、ガラガラと大きなものが崩れる音がして、ヒバリが声を張り上げた。

「よっし！ ゴーレム倒した！ ひいちゃん、ツグ兄いは！」

「ん、無事。リグも無事」

「シュー」

、(・w・)ノ

ヒバリに返事をするヒタキの肩越しに視線を向けると、あれだけ大きな敵だったゴーレムが岩の塊と化し、光の粒となって消え去ろうとしていた。

つて、早くヒタキから下りないと。

「た、助かったよヒタキ。ありがとう」

「ん」

ちょっと恥ずかしいけれど、ヒタキの機転によって俺とリグが助かったので、ちゃんとしっかり感謝しなければ。

それにしても、もう少し考えて行動しないとダメだな。

俺の作戦は、ゴーレムじゃなくてヒバリを一泡吹かせた感じになってしまったし。反省。

ゴーレム戦は俺とリグが空を舞った一瞬に決まり、トドメの一撃は、小桜と小麦のにゃん術だったらしい。

俺達の糸を振り払うため片腕が使えず、もう一方の腕はヒバリの相手。

すると足元がから空^あきになるので、ミイとメイがゴーレムの関節に刺さっているナイフを執拗^{しつよう}に狙い、狙い通り足に亀裂を入れることに成功する。

ゴーレムは石で出来ていて重いので、自重^{じじゆう}に耐えられず、片足は崩れ去った。

片膝をついた分ゴーレムの頭も下がり、チャンスとばかりに小桜と小麦がにゃん術で攻撃。

あとは時間の問題ですぐに倒すことができ、今に至るってわけだ。

俺も一応役には立ったわけだけど、自分とリグの身を危険にさらしているので落第点だな。

「ゴーレム倒したし、ギルドに報告してから反省会でもする？」

武器をしまったヒバリが俺達を見渡し、とりあえずといった感じで提案した。
ヒタキがヒバリの近くに寄り、至極真顔で「ギルドには行くけど、私は過去を振り返らない女」と一言。皆でひとしきり笑ってから、アインドへ向かう。

「過去は振り返らないにしても、今回の作戦はもう少し練った方が良かったのは確かですわ。情報収集も不十分でしたものね。情報は世界を制しますのに」

「んん、私達は屍を越えて前進するのです」

「む、自分達の屍で前進する件について」

楽しそうに話しながら歩くヒバリ達の後ろに、俺とペット達が続く。

リグは俺の頭の上にいるから良いとして、メイや小桜、小麦は疲れてないんだろうか？

視線を落としメイ達を見ると、それはそれは元気な姿が目映った。スキップしそうな勢いだ。

元気なのは良いことだ。うん。

ヒタキ大先生のスキルのおかげで、魔物に絡まれること無くアインドに帰還。

ささっとギルドにゴレム退治の報告をして、いつものように噴水広場の端っこに陣取った。

するとヒバリが「ねえねえ、こいつを見て」と、自身のインベントリからアイアンバッククラーを取り出す。

アイアンバッククラーは真ん中が大きくへこんでおり、その他にも大小様々なへこみがあつて、もはや盾としての機能は無さそうだ。

もちろん説明文には破損と書いてあり、次は鍛冶屋へ行かないと……かな。

ところが、ヒバリは盾をしまい、俺に向かって両手を突き出してきた。

「むふ、お駄賃くれたら鍛冶屋さん行ってくるよ」

「え、ついていかなくても良いのか？」

「お駄賃！ お駄賃！ お、だ、ち、ん！」

「えー。まあ良いけど」

見る者も楽しくなるニコニコ笑顔で手を差し出してくるものだから、俺はお正月にお年玉を孫へあげる祖父母の気分を味わいつつ、多めにお駄賃を渡した。

ヒタキもミイもついて行くだろうし、なんか食べたいものがあつたら買ってお食べ、って感じで。

「じゃあ行ってきますす！」

「ツグ兄い、お留守番よろしくね」

「めっめえめ〜！」

立ち読みサンプル はここまで